

アジアで初めての開催

去る9月13日から5日間、東京農業大学に於いて3年ないし4年に一度の「国際植物栄養科学会議」がアジア地域で初めて開催され、世界各国から科学者・研究者が集い、講演とシンポジウムや意見交換が行われました。

レスター・ブラウンの問い

会議のメインテーマは、「持続的な食糧生産と環境保全を推進する植物栄養学」で、「植物栄養学」の、食糧生産と環境保全への貢献に期待が込められていたと予想されま

す。その期待のためか、初日には「飢餓の世紀」のベストセラーで知られるワールドウオッチ研究所レスター・R・ブラ

ウン氏の記念講演がありました。

小生は「飢餓の世紀」のように、いかにも不安感を与えるような数字が羅列されている類の本は好きではないので、期待してなかったのですが、これが最高におもしろかったです。

どんな講演内容かといいますが、いきなり冒頭で、世界中の研究者に対して「皆さんに言いたい事は、果たしてその研究に価値を支払うような価値があるのか？」また、「食糧生産についてのテクノロジーは限界に達しており、

進歩があったとしても20%程度の増収しかない。収量の増加だけでは、食糧問題の問題解決にはならない」という発言がありました。

そして「問題解決のためには、消費側へのアクセスが必要であり、その場合、価格等の経済システム上での解決ではなく、根本的な問題解決のアプローチが必要である」と熱弁するのでした。

具体的なアプローチ

そのアプローチの要旨をまとめると

・水資源の利用を見直す

水資源の枯渇による減産事例が多く、今後水資源の枯渇が予想される。1tの穀物を生産するには10000tの水が必要であり、効率的な利用方法をとらなければならない。そのためには、イスラエルの灌水技術を学ぶべきである。また、排水の利用方法について研究すべきである。

肥料の効率的な施肥技術や太陽エネルギーの利用方法について研究すべきである

このような提案の他に、日本へのメ

恵まれている」というコメントがありました。

どういう事かというところ、アメリカのような大国からみれば、日本の農業は北海道であろうと、九州であろうと都市近郊型農業になるそうです。

アメリカの場合、産地から消費地までの輸送距離は平均1800キロあるそうです。(宮城県から沖縄までの距離が約1800キロ)

「日本は都市と農村の共存のバランスが整った手本である」と聞かされ、なるほどと思いました。

レスター・ブ

ラウン氏は日本の農業界でも有名な論客ですが、日本の農業関係者は自分達に都合の良い部分だけ「良いトク取り」をし、言葉

誤訳されてきた？レスター・ブラウン氏

第13回国際植物栄養科学会議に参加して

次の通りです。

・食物連鎖をダウンさせるべきである

現在、穀類栽培面積の37%が家畜用である。これを消費する富裕層の生活の改善が必要である。例えばこれらを消費する時には課税するようにする。

・他の栽培面積の転用

世界中のタバコ葉の栽培面積を穀物に転用すれば、穀物面積は1%増加する。それによって、18000万t分の穀類が増産される。休耕地の利用方法について研究すべきである。

メッセージがありました。

日本へのメッセージ

「米の自由化について、日本が反対するのは当然の事であるが、米価が国際価格の6倍にもなってしまうという構造的な問題や、農作物を大量輸入している事の問題解決はどうなっているのか？食糧を大量輸入している自国の安全保障について論じられているのか？」という内容でした。

また、「日本の産地は消費地に近くて

を誤訳しているのではないかと思います。

この記念講演の座長を務めた、ある日本の大学の偉い先生が、「なぜレスター・ブラウン氏が特別記念講演なのかよく分からない」という事を発言していたのですが、あれは果たしてジョークだったのか、それともほんとに理解出来なかったのか知る由もありませんが、小生は日本人として、出来ればジョークであったことを心から祈りたいものです。

(農援隊 後藤芳博)